

# 高齢者によるソーシャルサポート提供の動機と効果

富 樫 ひとみ

## Motives and effects of social support provided by the elderly

Hitomi Togashi

### 抄 録

本稿は、ソーシャルサポートの提供過程についての質的研究を行ったものである。調査に際して、高齢者8人に対してインタビューを行った。結果は、①サポート成立の前提条件は、原則として互酬性、類似性、共通性を基底にしていることであるが、家族間や異性間では、必ずしもそうとはいえないこと、②サポート提供過程は、欲求、義務感、債権的な感覚という動機によって行われ、関係の継続・深化の促進と関係の生起、肯定的な感情の生起という効果を生じること等が明らかになった。今後は提供・受領の双方を含む全体的なソーシャルサポートの過程についての研究を行っていきたい。

キーワード：高齢者

ソーシャルサポート  
提供過程

## はじめに

わが国の社会福祉政策は、1989年の福祉関係三審議会合同企画分科会答申の最終答申「今後の社会福祉のあり方について」で、市町村における在宅福祉の重視へと大きな方向転換がなされた<sup>1)</sup>。そこでは、在宅福祉を推進するための方策の1つとして、ソーシャルサポートが活用できる社会資源と位置づけられ、地域社会から高齢者に提供されるソーシャルサポートが高齢者問題を解決し、あるいは高齢者のQOLを高めるものと期待されている。しかし、コミュニティ・ケアにおけるソーシャルサポートの活用は必ずしもうまくいっているとは言えない状況にある。筆者はその理由を、高齢者を社会の被扶養者<sup>2)</sup>と位置づけていることに由来すると考える。すなわち、コミュニティ・ケアの対象となる高齢者は、社会的弱者であったり、日常生活上の問題を抱えている人であり、社会から保護されるべき立場とみなされている。そのため、ソーシャルサポートは高齢者の問題解決に活用すべき社会資源というとらえ方がなされ、高齢者はソーシャルサポートの受領者という立場に置かれるのである。しかし、私人間の社会関係は、基本的に対等・互恵的であり(藤崎、1998)、非対称的な社会交換は不安定である(Goodman、1985)。このようなソーシャルサポートの互酬性に基づく問題点は多くの研究者が指摘しており、コミュニティ・ケアにおけるソーシャルサポート活用の視点とソーシャルサポートの互酬性との乖離は、それぞれの本質の衝突から生じる問題なのである。そのため、ソーシャルサポートを社会資源として恒常的に活用しようとするコミュニティ・ケアはあまりうまくいかないのである。

筆者は、この点について、コミュニティ・ケアにおけるソーシャルサポート活用とは、ソーシャルサポートの受領を確保することではなく、ソーシャルサポートのある社会関係を構築することだと考える。そのためには、ソーシャルサポートの受領と提供の両側面からの研究が欠かせない。しかし、これまでの高齢者のソーシャルサポートに関する研究は、その多くが高齢者をソーシャルサポートの受領者と位置づける研究であり、高齢者をサポートの提供者と位置付ける研究は非常に少なかったのである。

本稿はこのような問題意識から、高齢者よるソーシャルサポートの提供過程の実際の調査分析を試みた。本研究は、ソーシャルサポートの全体像の理解と、またコミュニティ・ケアにおけるソーシャルサポート活用の基礎的資料に資すると考える。

## 1 調査の方法

### 1. 調査の方法と対象

調査は対象者の自宅で、半構造化インタビュー調査の方式で行った。インタビュー時間は1～2時間である。

インタビュー対象者は、京都市<sup>3)</sup>在住の65歳以上の在宅で、ADL自立・精神的自立をしている高齢者である。第1グループを女性高齢者4人(A子、B子、C子、D子)<sup>4)</sup>、

第2グループを男性高齢者4人（E男、F男、G男、H男）とした。身体上、ADL自立の高齢者に限定したのは、活動能力が高い高齢者は、さまざまなサポート提供を行っていると考えたからである。また、精神的自立の高齢者に限定したのは、インタビューを行ない得る程度に認知症がない可能性を求めたからである。女性と男性を別グループにしたのは、受領サポート研究で、ソーシャルサポートの実態や効果に性差が認められているからである。

## 2. 調査期間と質問内容

調査は、第1グループが2006年9月～10月に、第2グループが2006年10月～2007年1月に行った。質問内容は、対象者の属性および対象者の社会関係、対象者の1日の生活パターン、親族や親しい友人・隣人との具体的なやり取り、相手にしてあげたこと、ボランティア活動・町内会での活動の内容である。対象者の1日の生活パターンや親族などとの具体的なやり取りを聴取することによって、対象者がサポートを提供しているのととらえていない行為についても、サポート提供行為と思われる行為を拾いあげた。

調査を始める前に、対象者に対して、研究目的およびインタビュー内容の使用は学術的目的にのみ用いること、プライバシー保護についての説明を行った。インタビューは対象者の了解を得て録音した。対象者の発言は逐語化し、逐語化された文章をデータとした。

なお、対象者に関するデータについて、プライバシー保護のため、本題に影響しない程度に変更を加えた。

## 3. 分析の方法

分析は木下（2003＝2006）の修正版 M-GTA によるグラウンデッド・セオリー・アプローチに基づいて行った。グラウンデッド・セオリーは人間行動の動態説明理論（木下、2003＝2006）と言われており、グラウンデッド・セオリー・アプローチは、グラウンデッド・セオリーを導くための方法である。本調査の目的としているサポート提供の過程は、サポート提供行為とそれに対する影響要素の関係性と方向性を伴うものであり、関係性と方向性は理論の基本的要素である。したがって、本調査研究において、グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析は適切だと考える。

# II 調査の結果と分析

## 1. インタビュー対象者の概要

第1グループの女性高齢者は全員が配偶者と死別している。世帯の構成では、C子のみが息子家族と同居しており、その他の者は独居である。子どもの有無については、B子のみが死別しており現在はいない。現在、有職者はC子のみで、C子は週3日のパート就労を行っている。経済状況では、B子が一般的な平均からみて余裕がある状態であ

る。

第2グループの男性高齢者では、配偶者と死別しているのはG男とH男の2人で、この2人は独居である。E男世帯は夫婦および未婚の子ども、妻の親の4人世帯で、F男世帯は夫婦二人の世帯である。4人全員に子どもがある。調査日現在、有職者はE男とF男である。E男は自営業を営んでおり、定年はない。F男は、非常勤の仕事をしている。G男とH男は自営業をしていたが、両者とも今はしていない。身体状況では、H男が介護保険制度の「要介護認定1」の認定を受けている。経済状況では、F男とG男が比較的余裕のある状態だと思われる。

## 2. 生成された概念とカテゴリー

女性高齢者では36個の概念が生成され、それらは、提供サポートの形態や量、効果、サポート提供に際して何らかの影響を及ぼす要因について6つのカテゴリーに分類できた。男性高齢者では22個の概念が生成され、5つのカテゴリーに分類できた。これらのうち、「サポート提供の動機」および「サポート提供の効果」について述べる。

## 3. サポート提供の動機

サポート提供の動機には、①欲求、②義務感、③債権的な感覚の3つの要素があった。

### (1) 欲求としてのサポート提供

女性高齢者では、「基本的な欲求としてのサポート提供」という概念が生成された。サポート提供の動機を尋ねたところ、

A子「(孫への小遣いは社会的なしきたりでなく孫が) かわいいから (自発的に) します」

B子「(役に立つのはうれしい) 思いますけどね。もう、人のことするの好きなんです、昔から」

D子「(孫への小遣いは) ちょっと気持ちだけでもね、できたらと思って、それを楽しみに」

という答えが返ってきた。これらの発言から、サポート提供は、してあげたいという気持ちが根底にあるように思われる。サポート提供は、自然と湧き出てくるような基本的な欲求から行われると考えられる。

サポートを提供したい、という基本的な欲求は男性高齢者にもみられた。それらは、

E男「(後輩から飲み連れて行ってほしいと頼まれたとき) 気が合うし、でしゃろね。ほんで、飲みに行きますわね。」

F男「(次女に小遣いをやるのは) それ、惜しいね。そういう気持ちでいる子やから。」

可愛いやん」

G男「(孫へのお年玉や小遣いをやる気持は) そのときのうれしそうな顔……かわいい。かわいいの一言ですな」

H男「聴くくらいしかできませんけど、聴くことで、相手さんの気持ちが軽くなるんやったら、いくらでも聴きます、という感じですかねえ」

という発言に表れている。女性高齢者ほどの積極的な意識や感情は見られないが、気が合ったり相手が孫などであれば、自然と何かしてやりたい、という気持ちがあることがうかがえる。また表面上、頼まれた場合や何かのお返しの場合であっても、仕方なしという義務感ではなく、自然と、あるいは自発的にサポート提供をしている場合も多い。このような場合は、してあげたいという潜在的な欲求が根底にあると思われる。

男性高齢者では、この「基本的な欲求としてのサポート提供」の他に「自分のためのサポート提供」という概念も生成された。これは、相手への援助という形をとるが、自分のためになされるサポート提供で、自分の欲求を満たすという動機が強い場合である。サポート提供は、相手に対して行う行為なので、形の上では相手のためにすることになる。しかし、サポート提供という形をとっていても、相手のためというよりも自分が成長したい、や自分自身を鍛えたいという気持ち、何かを得たいという自分の欲求を満たすために行う場合があった。

これら女性高齢者と男性高齢者の動機を統合すると、「欲求」が動機の一つの要素として浮かび上がってくる。この欲求は、贈与交換理論<sup>9)</sup>という社会関係の中での優位者としての地位の取得という欲求も含むと考えるが、第一線を離れた高齢者では、このような欲求は低いと思われる。

## (2) 義務としてのサポート提供

女性高齢者では、「返礼としてのサポート提供」「対等なサポート提供」という概念が生成された。親族や友人、隣人に対してサポートを受領したことの返礼として、サポート提供が行われている。サポートは一回切りではなく連続して行い合っているのも、どれが最初のサポートでどれが返礼かを特定するのは難しいが、たいいてい場合は、授受の均衡が取れている。これに関する発言として、

B子「(恩を) 返すんだったらやっぱり郷に返しとかんと、と思ってるんですけどね」

D子「今までみんなにさせていただいたから……自分がこれからみんなに少しでもできたら……嬉しいなと思います」

がある。

返礼は、社会的には、互酬性・相互性という社会規範に制せられているものであり、ある種の強制力を持つ。また、心理上にも負い目の解消という役割を持っている。したがって、返礼には義務感という動機が基底にある。ただ、返礼は義務感のみで行われる

のではなく、義務感と基本的欲求が入り交ざったもの、と考える。

男性高齢者では、「返礼としてのサポート提供」・「対等なサポート提供」の他に「宗教心・価値観によるサポート提供」の概念も生成された。

対等なサポートの授受は、特別「お返し」を意識してなされない場合もある。しかし、この対等意識の背景には、借りを作りたくない、という意識すなわち、借りたら返すというお返し意識があるように思われる。そして、この返礼としてのサポートには、基本的には義務感と、してあげたいという欲求に基づくと思われる。義務感が強く表れる場合もあれば、欲求によって積極的なサポート提供がなされる場合もある。

「宗教心・価値観による提供サポート」では、相手に良いことをしてあげる、というサポート提供がなされる場合、「良いことをしなければならない」という内在化された強制力や義務感が働いていると思われる。

贈与交換理論では、返礼は義務とされているが、本調査でも、ほぼ同様の結果を得たことになる。

### (3) 債権的な感覚としてのサポート提供

女性高齢者では、「将来の期待に基づくサポート提供」という概念が生成された。これは、子どものいないB子の発言、「(姪を) ちょっとは頼りにします。今のところ元気やからいいんですけどね、やっぱり何かあったら言わないとあかんしね」から、将来のサポート受領に対する返礼として、現在のサポート提供が行われていることがわかる。したがって、将来に対する期待としてのサポート提供は、返礼としてのサポート提供の一形態と見ることもできるが、不確かな返礼を期待しているものであり、義務感を主体にしているというよりも将来のための貸し、という意味で債権的な感覚に基づくものと考えられる。この債権的な感覚を主体に義務感や基本的欲求が混合しているのである。

男性高齢者では、「未来への投資としてのサポート提供」という概念が生成された。これに関する発言として、

F男「(今が恵まれているから) 今度生まれてきた時ね、僕は返さんなんと思うから、今のうちに返しといたら、今度、楽できるやん」

G男「(息子への大学の費用提供などは) 返してもらわんとあかん。……僕らの年代の感覚では投資ですわな」

がある。F男は宗教的な価値観から、自分の来世のために現在、徳を積む一つの方法としてサポート提供を行っている。「今度、楽できるやん」という言葉からうかがえるように、義務感や内在化された規範に基づく内的な強制力よりも、来世への貸しを作っておこうという、債権的な感覚に基づいてなされる提供サポートである。

G男は、子どもへの経済的援助を投資ととらえている。ただこの投資の意味は、「返してもらわんとあかん」という発言から推察できるように、子どもの将来への投資とい

う意味合いが強く、自分に介護が必要となった時に面倒をみてほしい、という意味合いは少ないように思われる。将来の介護を期待するのではなく、貸している金の返還を求める、という債権的感觉である。

#### 4. サポート提供の効果

女性高齢者と男性高齢者でほぼ同様の結果が得られた。すなわち、サポート提供の効果は、①関係の継続や深化の促進と関係の生起、②肯定的な感情の生起の2つの要素から成り立っているといえる。

##### (1) 関係の継続や深化の促進、関係の生起

提供サポートは、受領と提供が一体となって関係を継続したり、深化させたりする効果がある。女性高齢者では、きょうだいや友人、隣人とは電話をかけあったり、世間話をしたり、おかずをやり取りすることで関係を深め、継続させていた。男性高齢者では、金品のやりとりや、愚痴・悩みの傾聴、また声かけなどで関係を深め、継続させていた。

サポート提供に対して拒否的な反応が示された場合には、関係の消滅や疎遠化がみられた。したがって、提供サポートは受領と提供が一体となって関係を継続したり深化させたりする効果がある。この結果は、贈与交換理論における効果と同じである。

また、提供サポートは親しい人との間だけで行われるのではなく、ボランティア活動やこれまで知らなかった人、親しくなかった人に対しても行われる。そのときは、知らなかった人や親しくなかった人との新しい関係を形成するという効果がある。F男の「(通りがかりの人に、庭の花や実をあげたら) それで友だち、ようけできた。全国にできた」や「そこで(喫茶店で)好きなこと言うて、笑うて、友だちができんのやから」という言葉のように、初めて会った人に物をあげたり相手を笑わせたりするというサポート提供は、その人と知り合うきっかけにもなり、また相手から好印象をもたれる。その結果、新しい人間関係が形成されるのである。

ところで、贈与交換理論では優位者としての地位取得も効果としているが、本調査ではそのような結果は得られなかった。これは調査対象者を高齢者に限ったことによると思われる。社会的地位の優位性を意識するのは社会的な競争が激しい生産年齢層に多く、社会的な競争から一步退いた高齢者はそれほど社会的地位の優位性を意識しなくても済むと考えられるからである。

##### (2) 肯定的な感情の生起

女性高齢者、男性高齢者ともに、「肯定的な感情の生起」という概念が生成された。サポート提供したときの気持ちは、相手が喜ぶことが嬉しいなど、肯定的な感情があったが、これは嬉しいという純粋な気持であると同時に、自分の厚意が相手に受け入れられた、認められたという満足感からも生じるとも思われる。

サポート提供が拒否された場合は、B子が「(おすそ分けで) ある中でもね、『これのほうがあえんじゃないか、珍しい』と思って持って行ってるのに、『これは私食べ

ないさかいにけっこうです』と) と言われるとがっかりしますやん」というように、拒否されたことに対してはわだかまりなどの否定的感情が生じることが認められる。

したがって、サポート提供によって生じる肯定的感情は、サポート提供の相手はそのサポートを受け入れたときに生じるものであり、提供と相手の受領行為が一体となったときに生じるものである。

一方、対極例としてE男の例がある。サポート提供した時、相手が喜ぶと嬉しいか? という質問に対するE男の答えは「そんなこと、あんまり考えたことないなあ。そんな気持ちは、あんまりありませんわ」というものであった。E男のような考えの人もいるだろうが、多くの場合は、サポートを提供した時、提供者本人に、肯定的な感情の生起がする。

## 5. ソーシャルサポート成立の前提条件

贈与交換理論では、互酬性という社会規範を基底に交換が行われる。本調査の結果でも、家族など以外の親族や隣人に対しては返礼という義務感や将来世話になることの期待感が共存していた。この意味することは、サポートの提供行為において、特に親族や同性の友人、隣人では、提供が一方的に行われて完結するのではなく、ソーシャルサポートの授受が前提になっていることと考えられる。すなわち、サポートを交換するという相互関係の存在がそれぞれの個人の意識にあり、それが時には義務感を生じさせ、また時には期待感を生じさせると考えられる。

したがって、家族以外の同性の友人・隣人間のソーシャルサポートは、互酬性という社会規範を基底にしているといえるが、さらにソーシャルサポートの本質は、互酬性・相互性であり、互酬的關係を具現するものがソーシャルサポートだと考えられる。

一方で、返礼は必ずしも期待されておらず基本的な欲求からサポートが提供される場合があった。ただし、その基本的欲求が強く現れる場合は、親密な家族や異性の友人間などのごく限られた範囲であり、この社会関係では、互酬性という社会規範を基底にしているとはいえないことが明らかになった。

調査結果はまた、同性の友人や隣人間に生活レベルと考え方などの類似性、共通性があることを示していた。これは、高齢者を対象にインフォーマルな相手とのやり取りに限定して調査を行ったためと考えられる。経済的交換やフォーマルな交換では、等価交換に重点がおかれるため、必ずしも当事者間の同質性や共通性は交換に必要でないと考えられる。したがって、調査対象の高齢者のソーシャルサポートにおいては、互酬性という社会規範の他に、友人・隣人関係では、相手との類似性、共通性も基底にしているが、他方、家族間や異性の友人・隣人間のソーシャルサポートは必ずしも類似性、共通性を基底にしているとはいえない。

## 6. ソーシャルサポートの提供過程

サポート提供は、個人2人の中で、同性の友人・隣人関係では互酬性の社会規範およ

び類似性、共通性を前提に、家族や異性間では互酬性および類似性、共通性にあまりと  
 らわれずに行われる。その過程は動機によってサポート提供が行われ、その結果何らか  
 の効果が生じる。サポート提供の過程における最も基本的な構成要素は、動機と提供サ  
 ポート、提供サポートの効果であり、これらを時系列に並べると、

動機 → 提供サポート → 効果

となる。動機には、①欲求、②義務感、③債権的な感覚という要素があり、効果には、  
 ①関係の継続や深化の促進と関係の形成、②肯定的感情の生起という要素がある。た  
 だし、サポート提供が拒否された場合の効果は、①関係の消滅、②否定的感情の生起で  
 ある。そしてこのソーシャルサポートの提供過程は、直線的流れるのではなく円環的に  
 流れると考えられるので、効果は動機に影響を与える要素となる（図）。

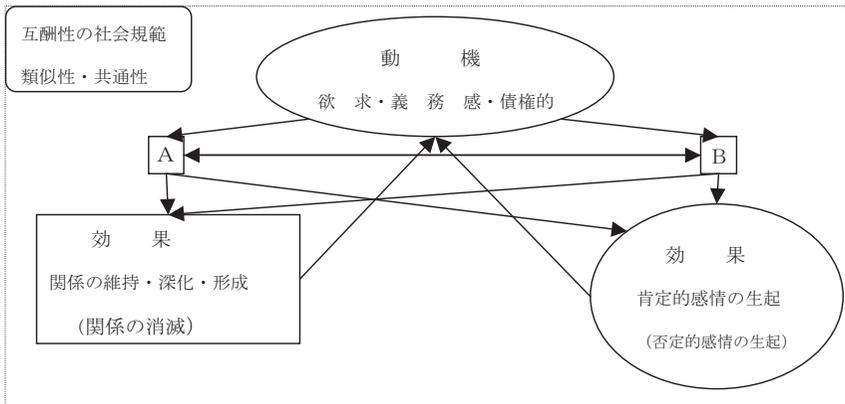


図 ソーシャルサポートの提供過程

- 注：1 A、Bは個人を、A、B間の矢印はソーシャルサポートを、その他の矢印は作用を表している。  
 2 「互酬性の社会規範」と「類似性・共通性」はAB間の関係性により、前提となったりならなかったりする。  
 3 ○は個人の内面を示し、□は対人関係や外形上認識できることを示した。  
 4 「効果」では、否定的な効果を（ ）で示した。

## おわりに

ソーシャルサポートのコミュニティ・ケアへの応用方法は、ソーシャルサポートの過  
 程や性質から導き出されることが必要だろう。すなわち、ソーシャルサポート活用の目  
 的は、高齢者の社会関係の継続や深化などであり、援助者は、高齢者のサポート受領の  
 みに焦点を当てるのではなく、高齢者でもできるサポートを提供するよう支援すべきだ  
 と考える。筆者は、今後高齢者にも可能なサポート提供の形態を探求していきたい。

ところで、本調査では、調査対象者を日常生活上、ADLが自立している高齢者に限  
 定し、また調査対象者が8人と少数であった。そのため、この調査結果を一般化するこ  
 とは難しい。この点が、本調査研究の限界であり、今後はこの提供サポートの量的調査

を行い、さらには、提供サポートと受領サポートの双方を含む全体的なソーシャルサポートの過程についての考察を行っていききたい。

なお、本稿は学位論文（社会学博士：立命館大学）の一部を加筆修正したものである。

## 注

---

- 1) 厚生統計協会 (1990)『厚生指標 臨時増刊 国民の福祉の動向 1990年』厚生統計協会を参考にした。
- 2) 本論文における「扶養」は経済的扶養だけでなく、「介護」や「日常的ケア」などの身体的な世話を含む。
- 3) 京都市は大都市である一方で歴史のある街である。在宅高齢者の近隣関係は、農村地域のように濃密ではないが一定の距離を保った付き合いをしている。このことから京都市在宅の高齢者は、大都市における一般的な高齢者と考えた。
- 4) 女性高齢者のサポート提供についての調査研究は、富樫 (2007 a) を参照されたい。
- 5) 贈与交換理論とは給付と反対給付に関する理論である。ソーシャルサポートの提供は個人から個人への給付に当たるため贈与交換理論を参考にした。贈与交換理論は互酬性という社会規範を基底にした交換で、贈る義務・返す義務および社会関係の中での是認と優位者としての地位の取得という動機及び社会的紐帯の強化と優位者としての地位取得という効果があるとされている。

## 文献

---

- 1) 藤崎宏子 (1998=2005)『高齢者・家族・社会的ネットワーク』 培風館：pp. 119-120.
- 2) Goodman, C. C. (1985) "Reciprocity among Older Adult Peers" *Social Service Review*, Vol. 59, No. 2: pp. 268-282.
- 3) 伊藤幹治 (1994) 「贈与交換理論の検討」 成城大学民俗学研究所 (編) 民俗学研究所紀要 第18号：pp.49-114.
- 4) 木下康仁 (2003=2006)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的研究への誘い』 弘文堂.
- 5) 厚生統計協会 (1990)『厚生指標 臨時増刊 国民の福祉の動向 1990年』 厚生統計協会, pp. 65-67.
- 6) 京都市総合企画局情報推進室情報統計課編 (2007)『とうけいでみるきょうと ー平成18年版一.』 京都市総合企画局情報推進室情報統計課.
- 7) 富樫ひとみ (2007 a) 「高齢者によるソーシャルサポートの提供 ー女性高齢者の場合ー」 花園大学社会福祉学部研究紀要 第15号：pp. 131-139.  
富樫ひとみ (2007 b) 「高齢者のソーシャルサポート提供に関する文献的考察」 福祉心理学研究 Vol. 4, No. 1: pp. 54-64.

## Abstract

This paper explores the results of a qualitative research project on the provision of social support by the elderly. Eight elderly participated in interviews, and two key findings were obtained.

- (1) In principle, prerequisites for support by the elderly are reciprocity, resemblance and commonality in social relationships. However, these three factors were rated less important in both familial relationships and social relationships with friends/neighbors of the opposite sex.
- (2) Motivations behind the provision of support were desire, a sense of obligation, receiving credit, contributing to the promotion of prolonged and more meaningful social relationships and the elicitation of more positive feelings.

Hereafter, further research should focus on comprehensive social support including both receiving and providing support.

Keywords : the elderly  
social support  
provision process of social support